アルプス交響曲について

橋本　眞介

2022年4月15、16日、愛知県芸術劇場コンサートホールに於いてR.シュトラウスのアルプス交響曲作品64を指揮者の小泉和裕氏、名古屋フィルハーモニー交響楽団定期演奏会に出演した。

私自身このアルプス交響曲の演奏は広島交響楽団（1番クラリネット）、九州交響楽団（2番クラリネット）、そして今回の名古屋フィル（C管クラリネットとバスクラリネット）で3回経験をした。この曲はR.シュトラウスの作品の中でも演奏時間が50分と長大な曲である。

R.シュトラウスの作曲の経緯は彼が14歳の時に、ドイツ･アルプスのツークシュピッツェで登山をしたときの体験が、この曲の元となっている。その後、1900年に交響詩『芸術家の悲劇』（未完）を経て、1902年には『アンチクリスト、アルプス交響曲』という名称でスケッチがされた。

この題名にはフリードリヒ・ニーチェの『アンチクリスト』からの影響が見て取れるといわれている。この時には4楽章形式の交響曲の構想も書かれている。

1911年からガルミッシュ＝パルテンキルヒェンの山荘で『アルプス交響曲』としてのスケッチを開始し、1914年から本格的な作曲に取り掛かったと言われる。

各部分は切れ目なく演奏され内容は以下の通り。

夜　Nacht

B mollの下降音階が順番に重なっていく不協和音（夜の動機）により開始される。金管楽器による山の動機が静かに登場する。何重にも分かれた弦楽器により音が厚くなっていく。

日の出　Sonnenaufgang

A durの太陽の動機がffで出てくる。調性を変えながらメロディーは引き継がれたあと、ゲネラルパウゼとなる。

登り道　Der Anstieg

低音弦楽器による山登りの動機から始まる。流れるような旋律になった後、岩壁の動機が現れ、舞台裏でホルンを中心とした金管楽器のファンファーレが奏される。

森への立ち入り　Eintritt in den Wald

弦楽器の16分音符の中、トロンボーンとホルンによる旋律が奏され、それに山の動機が絡んでくる。

小川に沿っての歩み　Wanderung neben dem Bache

小川のせせらぎの音が聞こえるが、登りであるので山の動機も重ねられる。

滝Am　Wasserfall

岩壁の動機に、弦楽器と木管楽器・ハープ・チェレスタによる滝の流れが重ねられる。

幻影　Erscheinung

水の中にオーボエの旋律による幻影が見えてくる。最後にホルンの旋律が出てくる。

花咲く草原　Auf blumigen Wiesen

山登りの動機が静かに聞こえてきたあと、曲は快活になる。

山の牧場　Auf der Alm

カウベルによる牛の擬音が鳴る中、牛の鳴き声とアルプホルンを模したホルンの音が聞こえてくる。その後、ホルンの旋律とともに登山者は道に迷う。

林で道に迷う　Durch Dickicht und Gestrüpp auf Irrwegen

山登りの動機と岩壁の動機が出てくる。そして山の動機が現れ、次へとつながる。

氷河　Auf dem Gletscher

明るくなり、山登りの動機が現れる。

危険な瞬間　Gefahrvolle Augenblicke

遠くから雷鳴（ティンパニのロール）が聞こえてくる。

頂上にて　Auf dem Gipfel

和音が響いた後、トロンボーンが頂上の動機を鳴らし、オーボエが訥々と旋律を奏でる。そして幻影で出てきたホルンの旋律が再び現れる。山の動機と太陽の動機が一体となる。

見えるもの　Vision

頂上の動機が和音の下から現れたあと、太陽の動機が管を追加してまた登場する。

霧が立ちのぼる　Nebel steigen auf

ファゴットとヘッケルフォーンが不安げな旋律を奏でる。

しだいに日がかげる　Die Sonne verdüstert sich allmählich

太陽の動機が短調で登場し、太陽が翳ってきていることを表している。

哀歌　Elegie

弦楽器により、登山者は悲しげな歌を口ずさむ。

嵐の前の静けさ　Stille vor dem Sturm

遠くから雷が聞こえてきて、だんだん暗くなってくる。ぽつぽつと降り出した雨は、次第に激しくなってくる。そして、風が吹き出してくる。

雷雨と嵐、下山　Gewitter und Sturm, Abstieg

オルガンの和音とウィンドマシーンによる風の吹く中、登山者は下山する。これは山登りの動機を転回し、逆の順序で用いることで表されている。強烈な稲妻が光り、最後にはシュトラウス特注のサンダーマシーンにより落雷が起こる。その後はだんだん静かになってくる。

日没　Sonnenuntergang

太陽の動機が転回され、日没を表している。登山者は哀歌を口ずさむ。

終末 Ausklang

オルガンにより太陽の動機が奏され、山登りの動機も回想的に使われ、あたりは暗くなってくる。

夜　Nacht

冒頭部の夜の動機がまた現れ、山の動機とともに静かに終わる。

私自身、ドイツ留学中（1997年）にこの曲が書かれた場所に訪れ、山頂まで登り360度アルプスの雄大な景色を見て感動し、この曲のイメージを記憶に残した思い出がある。

尚、今回の名古屋フィルハーモニー交響楽団の演奏はオクタヴィア・レコードよりCDとして発売されている。

https://www.nagoya-phil.or.jp/discography/discography22505